



スズキS210、**新型**プレリビュード etc. 注目新車**3人**が斬る!!

新型レクサスES
上海ショーに登場



2025 **6・10**

ベストカーは
10日/26日発売です!

Best Car
No.1カーマガジン!
自

ベストカー

定価**550円**
講談社ビーシー/講談社

SPECIAL
ランクル
カタログ

**SCOOP
CATALOG**



'25-'28
スクー
プ
期
待
値
ラン
キン
グ

**RX-7 STARLET HARRIER
ELGRAND DELICA
SWIFT SPORT and more**

国産車英雄列伝 Vol.21
スペシャルティカー列伝



マイナ免許証は是非々々
日本1000万円超え車絵巻
古今東西クセ強CAR

ランクルファミリー
丸わかり
GUIDE



人気トヨタ車ONLY徹底バイヤーズガイド

未来の証人

自動車界のトップが語る過去・現在・未来

「座る」にこだわりの世界を唸らせた
高瀬社長が見つめる近未来

高瀬嶺生 指定工場

FRP Custom

(有)FRPカスタム



ブリッド

高瀬嶺生社長

PART2

安定した収入を得られるトヨタのディーラー勤めを辞し、5年の在籍を限度に自動車パーツを扱う商社へと転職した高瀬嶺生社長。そこで数々の知己や経験によって「独立のヒント」をいくつも発見した高瀬氏は、いよいよスポーツシートを製造・販売する「BRIDE(ブリッド)」を立ち上げ、歩き出したのだ。

未来の証人

商社時代には、正直にあるべきを信念に営業

1969年、名古屋市内にある工業高校の「自動車科」を卒業後、地元のとヨタ系ディーラーに就職した高瀬嶺生社長(以下、高瀬氏)。ここでメカニック、サービフロント、セールスと、自動車販売の現場で多くの経験を積んでいた。「会社員として世間並以上

の収入があり、生活も安定していました。なによりも超が付くほどの堅実な会社です。いろいろな状況を考慮すれば「安定」を選ぶほうが普通だと思います。その一方で、穏やかに流れていく日常に「かすかな苛立ち」のようなものを感じていたことも事実だった。

「生来の、へそ曲がり、負けず嫌いなものかもしれない。」

「一見、変わりなく流れていく自分の生活に変化が欲しいという気持ちが頭をもたげてきたのです。社会に出て少し時間が経ち、経験を積んでくると『変化を欲しがっている自分』に気付くんですよ」

さらに年々厳しさを増していく日本の自動車排出ガス規制によって、牙を抜かれていく自動車を販売することにも『物足りなさ』のようなものを感じていたという。

「なんともやっかいな性格ですね。結局、私は安定よりも変化を選択したので。幼い頃からのひとつの夢であった『独り立ちしてみたい』という気持ちが後押しとなり、トヨタのディーラーを辞めることにしました」

「新しい職場として選んだのは、ディーラー時代の恩人から誘われた『自動車パーツを扱う商社』だった。『ここなら自動車ディーラーでの経験も活かせるし、当然ながらクルマの用品、パーツにまつわる新しい経験もできると思いました。ただし、本来は、お手伝いという立場だったこともあり、『5年で独立します』という条件を会社に宣言しての入社でした。我ながら『上から目線』だとは思いましたが、最終的には『いつかはこの世界で独立し、トップを取る』という信念が、小さくとも確かな灯火として心にあったのです」

ある意味、退路を断った。決断による転職。今度はディーラーで経験できなかった、新しい自動車の世界に飛び込む決断だった。『もちろん不安はありましたが、5年で独立するとも告げていましたから、けっこうしびれる決断でした。でも、心のどこかで『必ず上手くいく』という、妙な確信があったんです。昔から不思議に自分自身を信じていることが、得意だったのかもしれない」

失礼を詫言え「いい意味での自惚れ」だが、この時の決断がなければ、日本のシートメーカーとして後に世界でも高い評価を得ることになる「BRIDE(以下、ブリッド)」は誕生しなかったかもしれない。

時代は80年代へと移り、日本国内でもモータースポーツ人気が少しずつ盛り上がりを見せていた。プロのレーシングドライバーによるサーキットでのバトルに熱中すると同時に、自らも参加したいというアマチュアレーサーたち、さらに愛車のポテンシャルを向上させたいといったクルマ好きも増えていた。

「若者たちを中心に、愛車によるスポーツ走行の人氣が急激に上がってきていました。大学の自動車部の活動も盛んでしたし、ラリーやジムカーナなども流行し始めていた頃です。そういった競技車両向けのアフター



市販車ベースに改造を施したグループ5aシルエットフォーミュラ。こうしたレースが人気となり、スポーツシートも普及していく

今回の証人
高瀬嶺生とは？

1951年愛知県生まれ。「早く社会に出る」ことを目指し、67年に県内の公立高校で一校しかなかった「自動車科」のある工業高校へ進学。69年、高校卒業後はトヨタ系ディーラーに就職し、メカニック、サービフロント、セールスとして経験を積む。その後、転職した自動車部品の卸売会社でさらに経験を積み、81年に独立。

「BRIDE」ブランドのスポーツシートを製造・販売する「ブリッドCO.(現ブリッド)」を設立して、リクライニングモデルの原点「GT」を発表。さらにフルバケットシート「PRO-R」を発売し、91年には全日本トヨタライアル選手権参加車両のなかでシェアナンバー1を獲得。現場の声を聞き、メイド・イン・ジャパンの物作りにこだわり、シート一筋に「お客様第一主義」を貫いてきた高瀬氏の信念により、その評価は世界的なものへと昇華する。そして13年には「ワンランク上のプレミアムスポーツシート」というクジュアリー路線「edirb」シリーズを立ち上げ、16年にはサッカークリニック、ガンバ大阪のホームスタジアム「パナソニック・スタジアム吹田」の選手用ベンチとしても採用。19年10月より一般社団法人日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会(NAPAC)の会長に就任し、現在は相談役を務める。

「パーツも急に増えているといった印象でした。そうした人たちに引きずられることもあり、普段乗りのクルマのポテンシャル向上がちょっとしたブームでもありました。そうした流れに伴って私が扱っていたスポーツ系のパーツの需要も高くなっていったんです」

「不思議なんです、これまでも『ちょっと困ったなあ』と思うような状況になると、不思議とどこからか『助けが来る』というか、世の中の流れが変わったり、手を差し伸べてくれる人が現われたりすることが多い。そうした機会や出会った人たちに助けられて今があるのかも知れません」

どこまでも謙虚であるが、その態度に嫌みはなく、真つ正直という印象がすべてに優先する高瀬氏だ。実は「不思議な助力」が、シートの製作へと向かわせることになる。

「エンジンや足回り、さらにエアロパーツなどチューニングパーツはほとんど需要が増えていきました。しかし、不思議なことにシートへの強いこだわりを口にするドライバーは少なかった。いや、興味や購入意欲はあっても対象となるのは『レカロ』とか『スパルコ』といった高価な輸入品。スポーツ走行にとって優先すべきシートの普及を鈍らせていたのかもしれない」

「この分析は実に鋭く、そして的を射たものだった。『白状すればマフラーでもエアロでも、ブレーキやサスペンションでも、なんでもよかったんです。ただ当時の状況を冷静に分析すれば、『国産でライバルメーカーがないことはむしろ狙い目ではないか』と考えました。さらにシートは汎用性が高く、いろいろなクルマに装着できるため、製造コストも抑えられることも強みになる。確かにニッチ（狭い）市場かもしれないですが、ライバル品の多いチューニングパーツよりは『展望が開けているのでは』と思ったのです」

「このあたりの見極めの鋭さには感心するばかりだ。大抵は『安定志向』のバイアスが働き、少しでも数が期待できるマーケットを選択するだろう。なにより、ライバルが少ないというこ

とは「国産のシートが成立しない重要な要因」があるのではないだろうか？ 例えば「輸入品にはどうやっても適わない、適うわけがない」という「ある種の卑屈さ」のようなものだ。だが高瀬氏は違った。

「汎用品であり開発や製造にコストがかからなければ、その分の手間暇を品質向上につぎ込めます。そうすれば、先行し確固たる地位を築いている輸入品にだって太刀打ちできるのではないか？」と考えたんです

そのうえで心に強く決めていたことがあった。

「パーツはいろいろとありますが、私は器用ではないほうなので、いろいろなものに手を出さないこと。シートと決めたら徹底してこ

だわり、掘り下げて物作りをしたい。もちろん多角型経営などにも手を出すつもりはありませんが、できなかったと思います」

この高瀬氏の物作りに対する姿勢こそ「シート一筋



ブリード創業時の社屋。ここから品質にこだわり、世界的なシートメーカーへと成長していく

立した。30歳の決断だった。経営者としては『若い』と言われるかもしれないが、不思議と不安よりも希望に満ちた船出であった。

「確かに実績も何もない状況だったので不安でしたが、そんなことで悩んでいる場合ではないのです。失敗は許されないうえに、戻る場所もない状況で会社を立ち上げたんです。当初は仕事も多くないわけですから、シート以外のことも少しこなしながら、なんとか生存している状態でした。それでも時代性に合わせながら、前進あるのみでした」

さらにもう1点、社名に影響を与えたのが、当時セイコー（SEIKO）から発売された、世界初のデジタルアラーム・クロノグラフ機能を備えたダイバーズウォッチ「150m Hi-Brid diver」だった。アナログ表示とデジタル表示が組み合わさっていることから「ハイブリッドダイバー」というサブネームも付いた。80年代に入ると、時計の世界も機械式時計から電子化によるデジタル時計への移行期という

か変革期にあり、その象徴とも言える存在だった。

「デジタルとアナログの利点を兼ね備えた優れたリストウォッチは世界的にも話題となっていました。同時に私も未来への可能性を感じさせてくれる存在として、大きな刺激を受けたのです。ハイブリッドとの語呂合わせと言ってしまうとそれまでですが、未来へと歩き出した私にとってまさに『これだ！』という思いでした」

「ブリッド」の社名は映画と時計の影響から

そんな決意を表現したというのがブランド名「BR

ID E」であり、現在の社名「ブリッド」だという。実はこの社名、高瀬氏が青春時代にバイブルのようにして観ていたアメリカ映画「ブリット（BULLETT）」に由来している。68年のアカデミー編集賞を受賞した名作で、壮絶なるカーチェイスが大きな見どころの刑事アクション。主演のステイブ・マックイーンといえ

ば高瀬氏の世代にとって、まさに「男らしさの象徴」でもある名優であると同時に、クルマ好きにとっても必見の作品と言つていいはずだ。

自動車のシートという小さなマーケットに合わせるかのように、社員2〜3名ほどの小規模な体制でスタートしたブリッド。小さいながらも当初からシートへの人並みならぬこだわりを持っていた。

「ニッチな需要にだけに『誰にでもフィットするシートを作る』などということは考えませんでした。ヨーロッパの人とアジア人というだけでも体型はまったく違います。もちろん妥協すれば『どちらも座れるシート』は作れるかもしれませんが、シートの位置によ

ってはフィット感はかなり希薄になってしまふのです。そこで『まずは日本人に満足してもらえらるシート』を作ろうとこだわりました」

さらにメイト・イン・ジャパンというか、言つてしまえば「メイト・イン・愛知の品質」にこだわって仕上げた。小さいながらも、揺るがない信念に支えられて、レーシングスポーツを



核としたスペシャルカーシートの専門メーカーが動き出した。

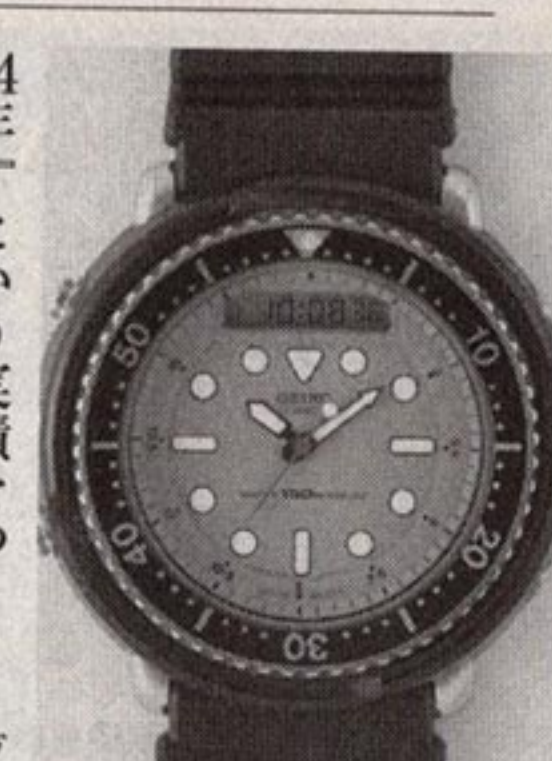
「ホールド性や剛性に優れ、ロングドライブでも疲れない座り心地のいいシートを製作すれば、評価はしもらえるだろう」

高瀬氏はそんな信念というか確証のようなものを抱いて歩き出したのだが、世間はそんな思いさえ打ち砕くのだった。ここからの証言は次号へと譲ろう。

器具ではないほうなので「シート作り一本」に絞って製造を続けてきたのが現在の評価を生んだという高瀬社長



現在まで丁寧な手仕事による「メイト・イン・ジャパン」を実現し、高い品質を保ち続けている



社名に影響を与えたというセイコーのデジタルとアナログのハイブリッド表示を実現した「ハイブリッドダイバー」